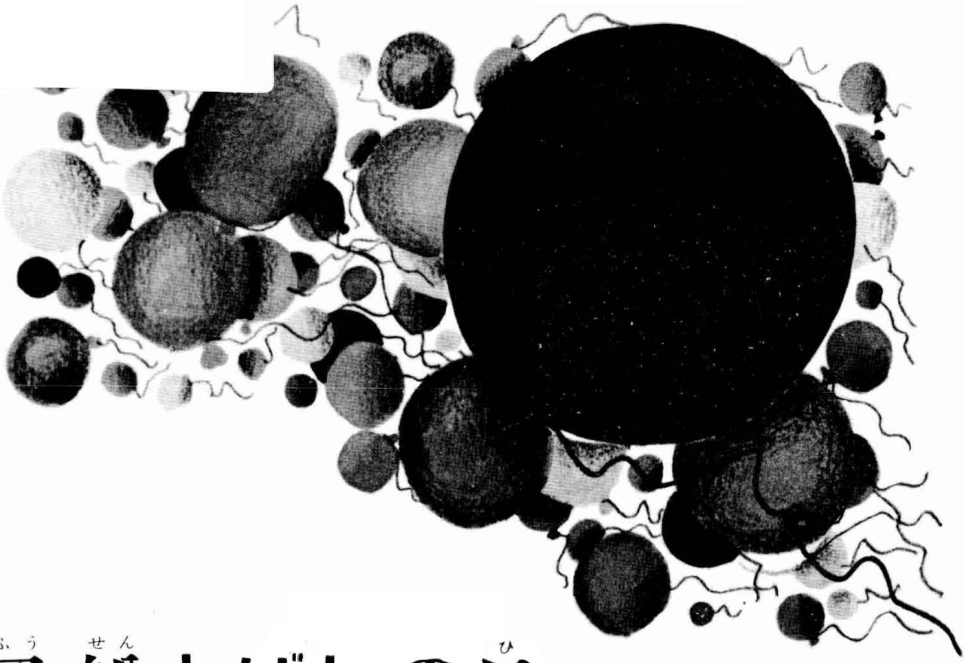
風船とばしの日

ヘイウッド作　厨川圭子訳

風船(ふうせん)とばしの日(ひ)

発　行　1980年8月　初版1刷
作　者　キャロリン=ヘイウッド
訳　者　厨川 圭子(くりやがわ けいこ)
発行者　今村 廣
発行所　東京都新宿区市ガ谷砂土原町3-5　偕成社(かいせいしゃ)
印　刷　中央精版印刷　製本　中央精版印刷
N.D.C 933 182p 21cm　8097-521030-0904

©Keiko KURIYAGAWA 1980 Published by KAISEI-SHA, Printed in Japan.
落丁本・乱丁本はおとりかえします。



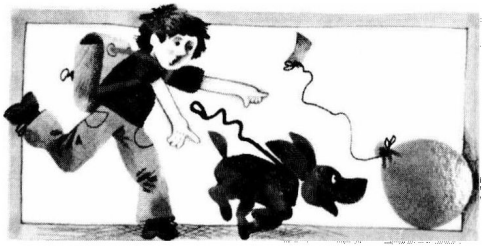
風船とばしの日

キャロリン＝ヘイウッド／さく　マルグレット＝レティヒ／え
厨川圭子／やく

◈ もくじ

風船とばしの日……6
オレンジ色の風船……30
まどからとびこんだ風船……47
お月さま風船……74

みどりの風船号……94
まほうつかいの風船……115
とりちがえた風船……141
かえってきた風船……163
訳者あとがき……180



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

AWAY WENT THE BALLOONS

by Carolyn Haywood : ill. by Margret Rettich
Text copyright © Carolyn Haywood 1973
Illustration copyright © K. Thienemanns Verlag 1975
Originally published by William Morrow and Company, New York
Japanese edition published by KAISEI-SHA Co., Ltd 1980
by arrangement with Tuttle-Mori Agency Inc.,

（この本の原書はアメリカで出版されたものですが，絵はドイツ語版のものを使用しました。）

風船とばしの日

ヘイウッド／作
厨川　圭子／訳

風船とばしの日

リネットは、せのびをして、げんかんのベルのボタンを、つよくおしました。家のなかで、ベルがじんじんなるのをききながら、ボタンをおしつづけていると、おかあさんが、あわててドアをあけました。おかあさんは、リネットをみおろしながら、いいました。

「まあ、なんてやかましいんでしょう。どうかしたの？」

「はやくおかあさんに、はなしたくって、うずうずしてたの。」

リネットは、家のなかへ、かけこみました。

「学校でね、風船とばしがあるんだって。」

おかあさんはドアをしめました。

「まあ、まあ、おまちなさい。だいどころへきて、ミルクとクッキーをたべて、それからゆっくり、おはなしをきかせてちょうだい。」

リネットはセーターをぬいで、おかあさんのあとから、だいどころへいきました。おかあさんはミルクをコップについで、クッキーのつぼから、クッキーをいくつかとりだしました。リネットは、「風船とばしの日」のせつめいをはじめました。

「その日にはね、学校で、ひとりが二つずつの風船をもらうのよ。とっても大きな、ぴっかぴかの風船で、ながいひもがついているんだって。その風船をもって、校庭にでるの。下校のベルをあいずに、みんないっせいに、もっているひもをはなすんだって。ぜんぶの風船が、ふわりふわりと空にとんでいくのよ！」

リネットはここで、はなしをやめて、しばらくクッキーをたべていましたが、さいごの一かけらを口にいれると、いいました。

「あ、そうそう、いうのをわすれてた。そのひもにはね、カードがついているんだって。そのカードには、ブルー・ベル小学校のなまえと、あたしたちひとりひとりのなまえがかいてあるのよ。」

「どうしてカードなんかつけるの？」おかあさんが、ききました。

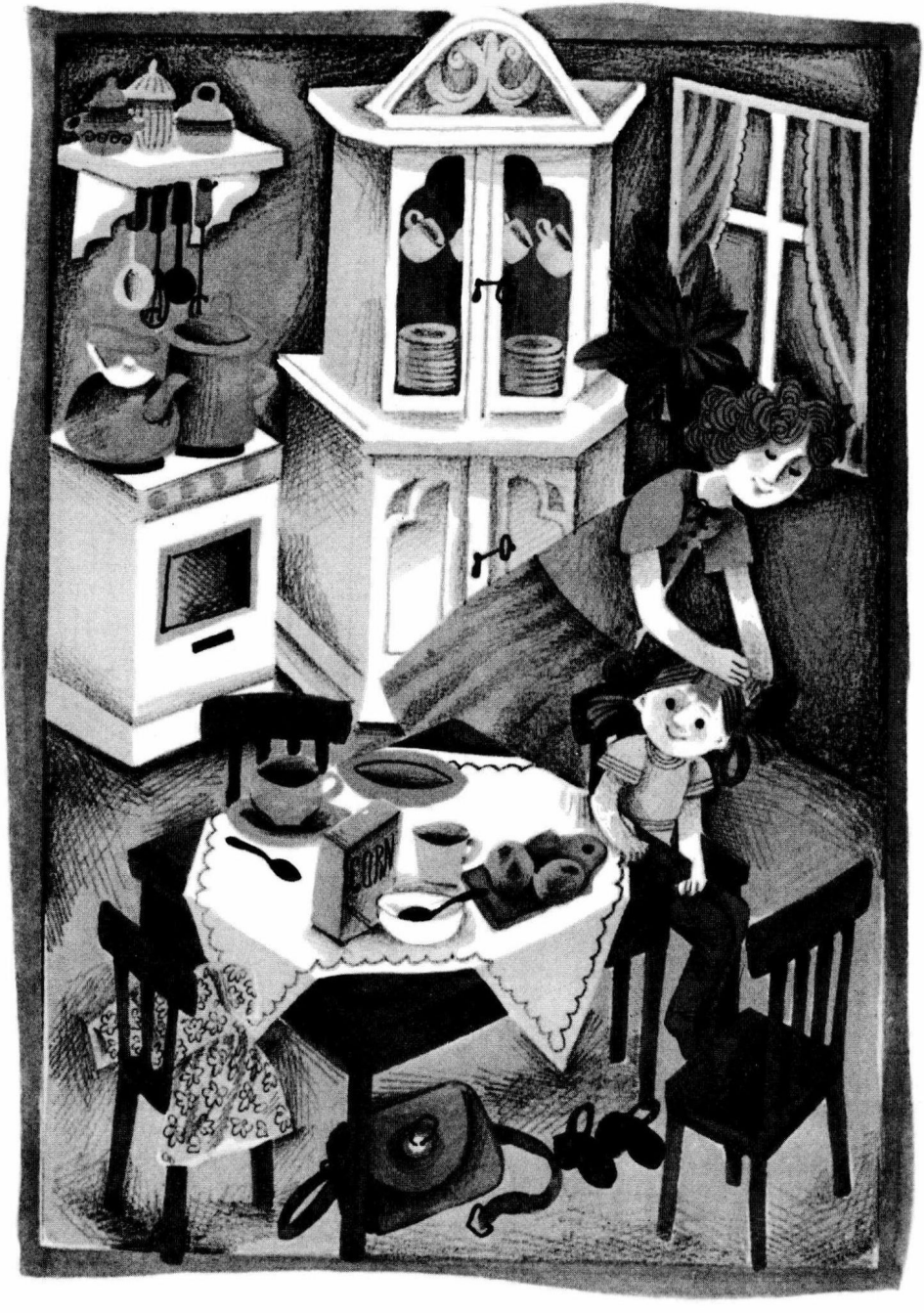
「だって、そうしておけば、風船がおちてきて、だれかがひろったとき、そのカードにかいてあるなまえの人に、おてがみがかけるじゃない。」
「で、その風船とばしの日って、いつなの？」おかあさんがききました。
「こんどの金曜日。」リネットがこたえました。「だけど、あたし、わかんないなあ、なぜ風船がおちるんだろ？　なぜいつまでも、ふわりふわりと、うかんでいないのかしら？」
「たぶん、風船の中にはガスをつめてあるのね。だから、そのガスがもれると、下におちてくるんだわ。」おかあさんがいいました。
「へーえ、そうなの。で、さっとおちてくる？　それとも、ゆっくりと？」
「ゆっくりとおちてくるんでしょ。」おかあさんがこたえました。

*

さて、その金曜日になりました。リネットは、はやくおきて、おかあさんにききました。
「ねえ、きょうは金曜日よね？」
「そう、金曜日よ。」

「わあ、うれしい。風船とばしの日だわ。」
おかあさんはリネットのかみをとかして、赤いリボンをむすんでやりました。
「さあ、ふくをきて、ごはんにしましょうね。」
リネットが朝ごはんのテーブルにつくと、おかあさんがいいました。
「きょうは風船をとばすのに、もってこいの日ね。いいお天気だし、風はかなりつよいし。さっき、せんたくものをほしながら、そうおもったの。このぶんでは、風船は風にのって、かなりとおくまで、はこばれるでしょうよ。」
「どのくらいとおくまで？」リネットがききました。
「そうねえ、なんマイルもとおくまで、はこばれるでしょうね。」
「一マイルって、どのくらい？」
おかあさんは、リネットのコップにオレンジ・ジュースをそそぎながら、ちょっとかんがえました。
「そうねえ、リネットはまい朝、学校まであるいていくでしょ。あれが半マイルくらいだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


CORN

から、かえりもあるけば、一マイル（一マイルは約千六百メートル）くらいあるくことになるわね。」
「あら、あたしの風船が、あたしの家にもどってきたら、こまっちゃうわ。だって、そうしたら、あたしがあたしに、てがみをかかなくちゃならなくなるもの。」
おかあさんはわらいました。
「そんなしんぱいは、いらないわ。この風なら、だいじょうぶよ。ずっととおくへ風船をはこんでくれるから。」
リネットはオレンジ・ジュースをのんでから、コーンフレークをたべました。
「ブライアンてばね、風船を家にもってかえって、たいせつにしまっておくんだって。でもね、ダイアンは風船をとばすっていってたわ。てがみをもらいたいからだって。」
ブライアンもダイアンも、リネットとおなじ一年生です。
「あたしだって、とばすわ。てがみがほしいもん。」
「とうぜんよ。風船は、とばさなくちゃ。とばすためのものでしょ。」おかあさんが、いいました。

「ねえ、おかあさん。あたしにも、てがみがくるとおもう？」
「くるといいわね。でも、もしこなくても、がっかりしちゃだめよ。」
「なぜ？」リネットは、トーストのさいごの一かけらを口にほうりこみました。
「だって、風船は、だれにもみつからないようなところに、おちるかもしれないでしょ。」
おかあさんがこたえました。
「だれかが、あたしの風船をみつけてくれますように。」
リネットはいすからおりると、セーターをきて、かばんをもちました。
おかあさんが、げんかんまでついてきました。
「ダイアンをさそってあげるんでしょ？」
「もちろんよ。あたし、いつだってさそってるわ。」
おかあさんが、げんかんのドアをあけると、リネットは、おかあさんに「いってまいります」のキスをしました。
通りをかけていって、かどをまがって、ダイアンの家のほうへいくと、ダイアンが門の

ところで、リネットをまっていました。ブライアンも、いっしょです。

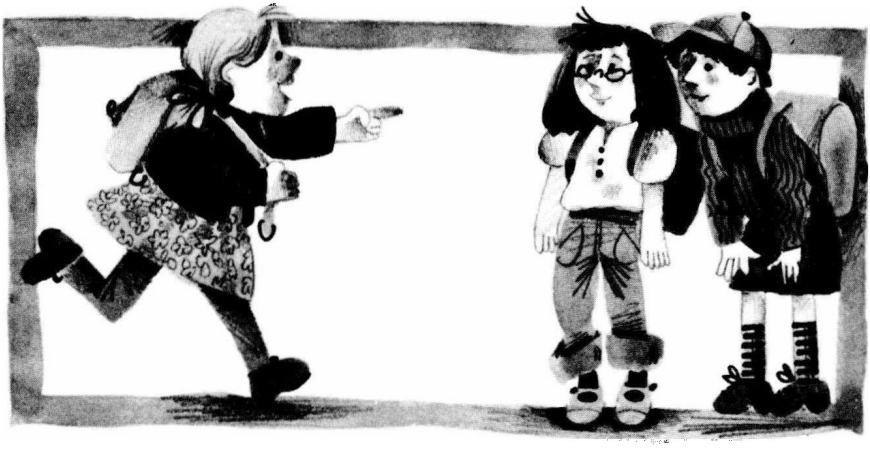
「おはよう、リネット。」ダイアンが、こえをかけました。「きょうは、風船とばしの日よ！」

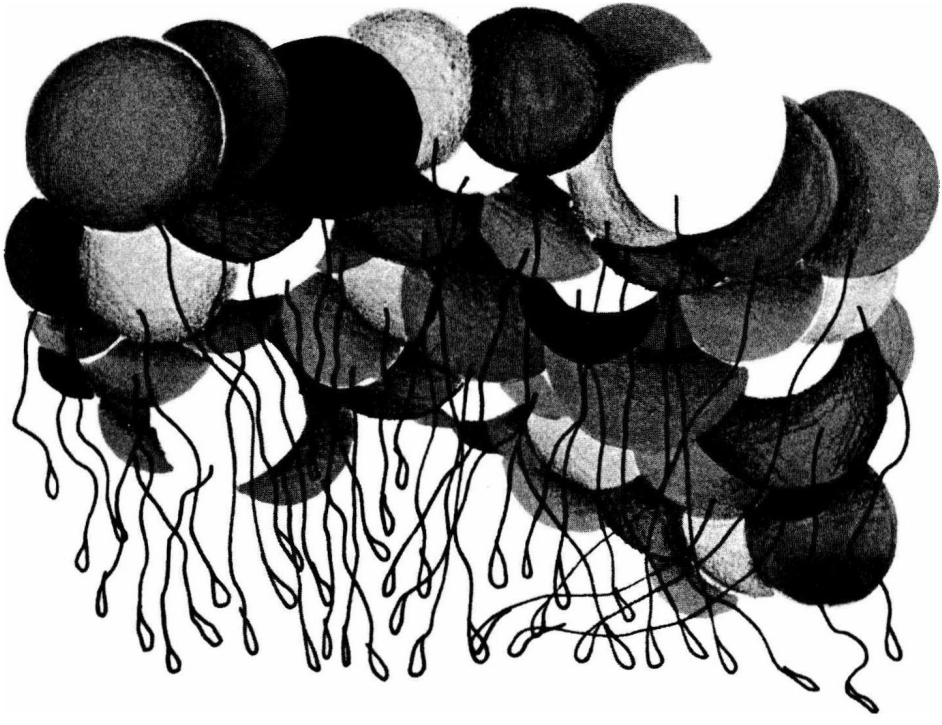
「しってるわ。」リネットがいいました。

「それにね、うちのおかあさんがいってたわ。きょうは風がつよいから、風船は、とおくまでとんでいくでしょうって。」

「どんな風がふいたって、ぼくは風船、とばさないよ。」ブライアンがいいました。「しっかりとにぎって、はなさないんだ。いつまでも、だいじにしまっておくのさ。」

「風船をとばさなきゃ、てがみはもらえないわよ。」リネットがいいました。





「かまうもんか。てがみなんて、ほしくないや。ほしいのは、風船さ。」ブライアンがいいました。

三人が学校のほうへあるいていくと、ひとり、ふたりと、ともだちがふえて、そのたびに、「きょうは、風船とばしの日よ！」と、こえをかけあいました。

学校についたときは、おおぜいのせいとがあつまってきて、ホールの入り口のところでは、おしあい、へしあいです。上級生の男の子たちが、ドアをおさえて、一年生をとおしました。

せいとたちは、ホールへはいると、「わーっ」と、かんせいをあげました。なん百という、きれいな、あたらしい風船が、ホールのてんじょうを、うずめつくしていたのです。

いろんな色の風船がありました。赤、みどり、こい青、うすい青、むらさき、ピンク、オレンジ、そして白。色とりどりの風船が、てんじょういっぱいに、うかんでいます。そして、その風船からは、ひもがたれて、そのさきには、カードがついていました。せいとが、風船の下をとおると、せいのたかい子のあたまに、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com